

中央防災会議
「東南海、南海地震等に関する専門調査会」
(第8回)

説 明 資 料

平成 1 5 年 2 月 4 日
中央防災会議事務局

東南海、南海地震等の震源域、波源域の検討について

東南海、南海地震の抜本的対策を講じるための検討をすべく、中央防災会議「東南海、南海地震等に関する専門調査会」では、まず、その対象となる地震像とそれによる被害の状況を検討し、これを基に、対策の内容を詰めることとしている。

今般、東南海、南海地震等については、その発生の仕方に様々なケースが考えられ、当調査会においては、

- (1) 想定東海地震、東南海地震、南海地震の震源域が同時に破壊される場合
- (2) 東南海地震と南海地震の震源域が同時に破壊される場合
- (3) 想定東海地震と東南海地震の震源域が同時に破壊される場合
- (4) 東南海地震単独で発生する場合
- (5) 南海地震単独で発生する場合

の5つの発生形態ケースについて検討することとしている。

第7回において上の(2)について、その想定される強震動の揺れの分布と津波の高さの分布、その代表的な被害の一つである揺れによる建物被害の状況について報告した。

今回は、上の他の発生形態について、計算結果の評価検討の基とする震度分布、津波分布を過去の地震の被害実態の重ねあわせ等により作成した。また、各4ケースについて、中央防災会議「東海地震に関する専門調査会」、および文部科学省の地震調査研究推進本部の検討成果によるものを初期モデルとして、アスペリティ配置やすべり量を前回の考え方を踏襲して設定し、計算結果を得た。この計算結果と評価検討の基とする震度・津波分布との比較からアスペリティ配置やすべり量のそれぞれのモデルにおける妥当性を検討した。

特に、東南海、南海地震の境界は、震源域、波源域共に紀伊半島先端よりやや東にあるのが適切であると思われるが、さらに検討を行う。

また、これら検討評価の基とする震度分布、津波分布により、より適切な震源域、アスペリティ配置、および波源域、すべり量について検討し、防災対策のための強震動及び津波を推定する。

東南海地震、南海地震等の比較検討の 基とする 震度分布 及び 津波の高さ

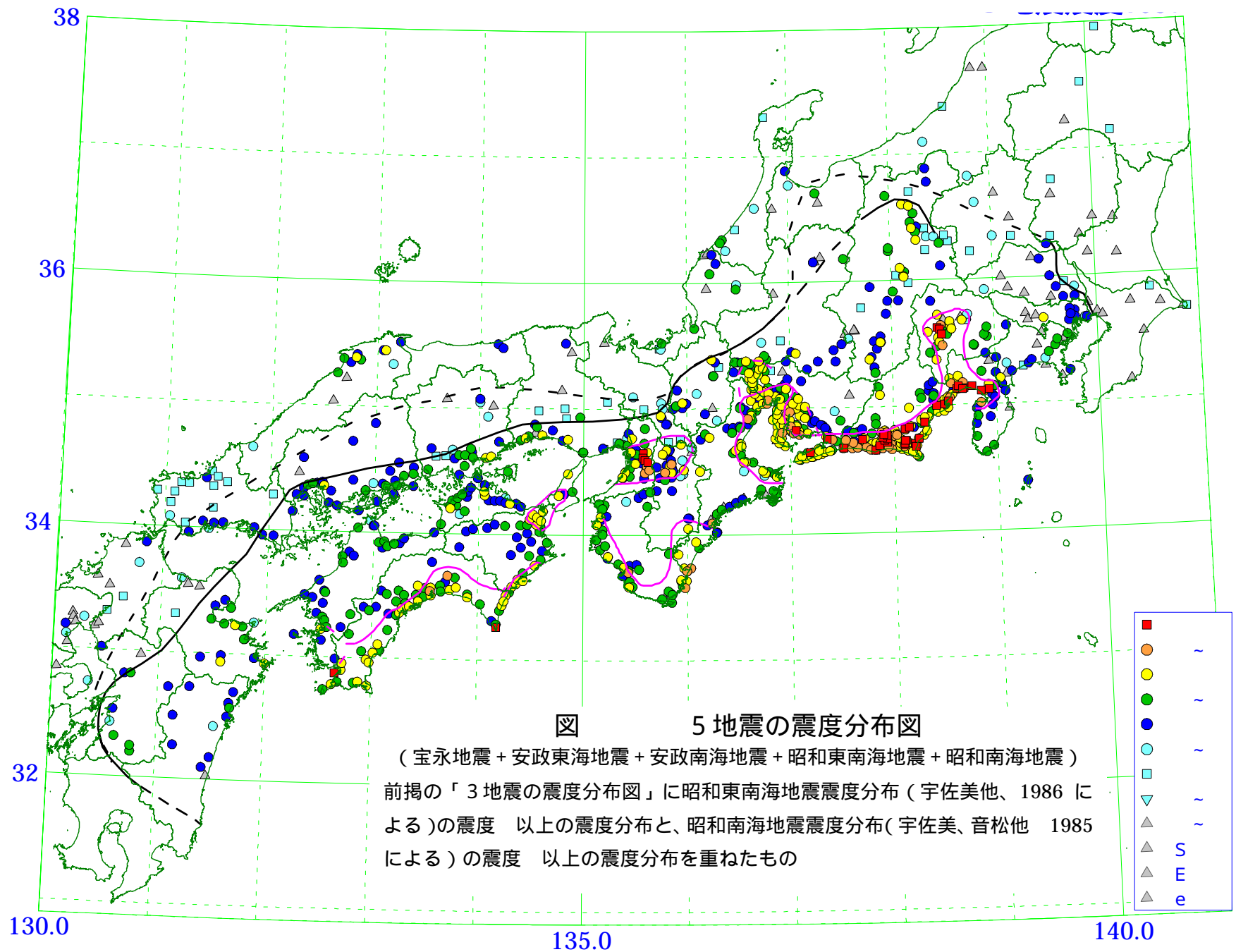
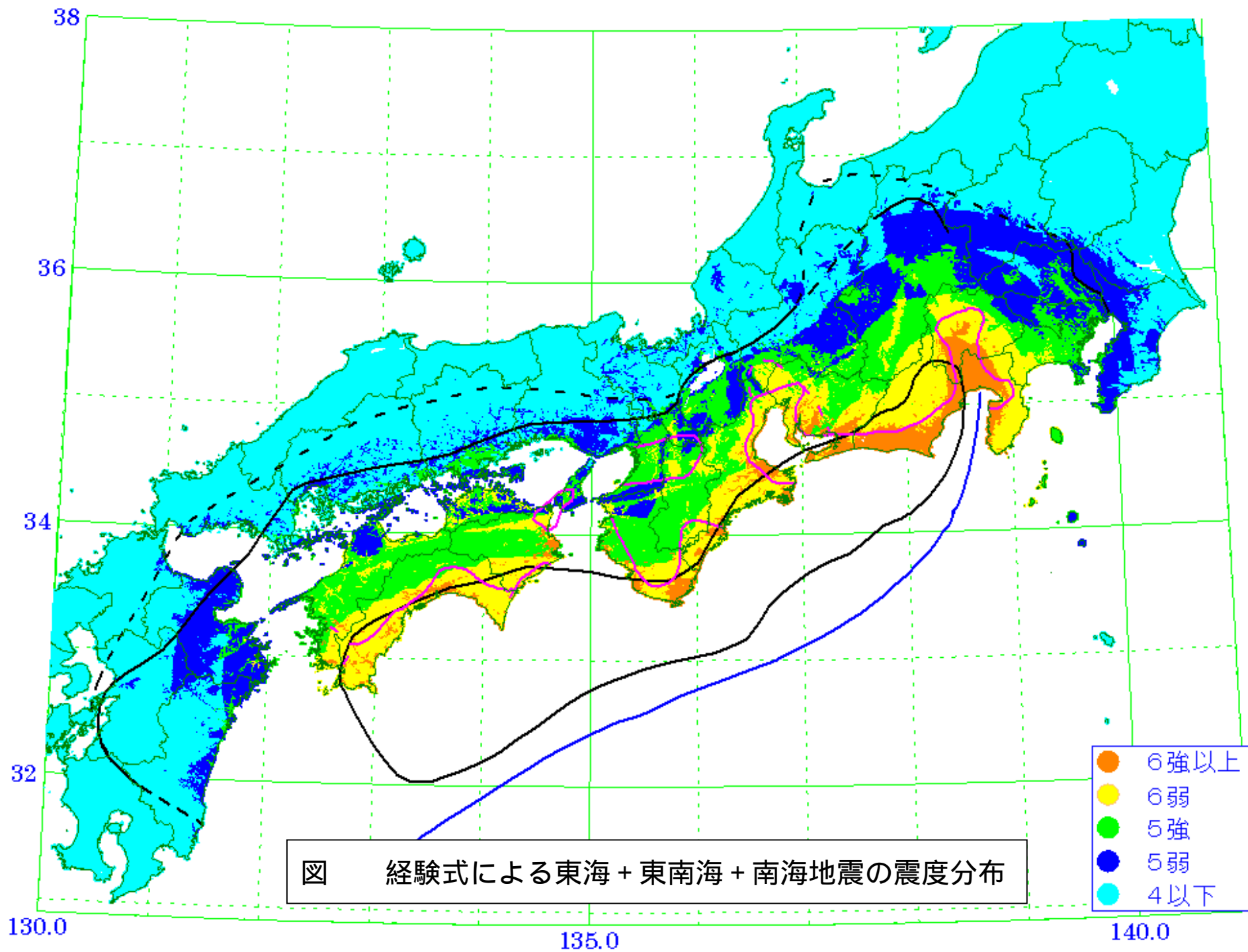
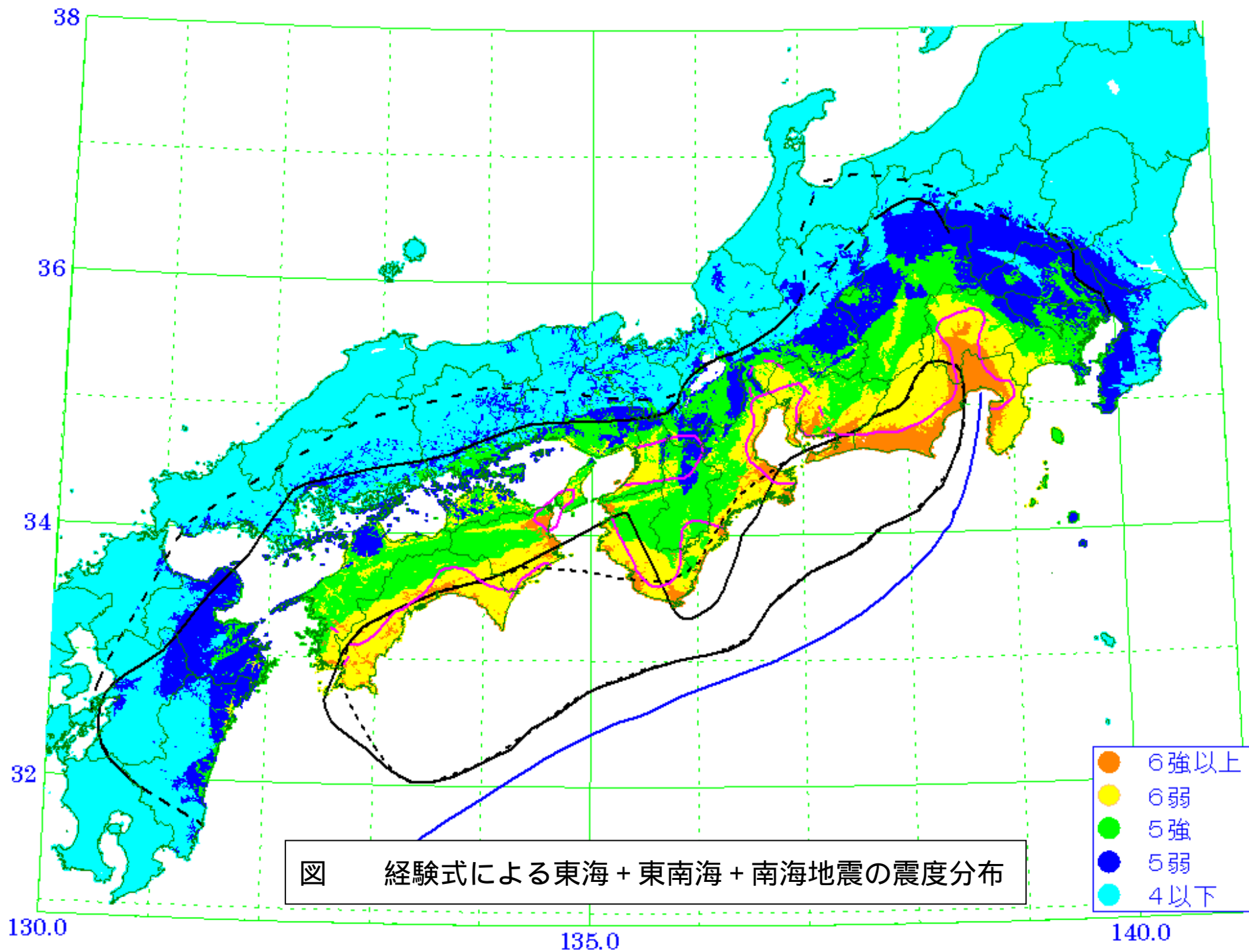


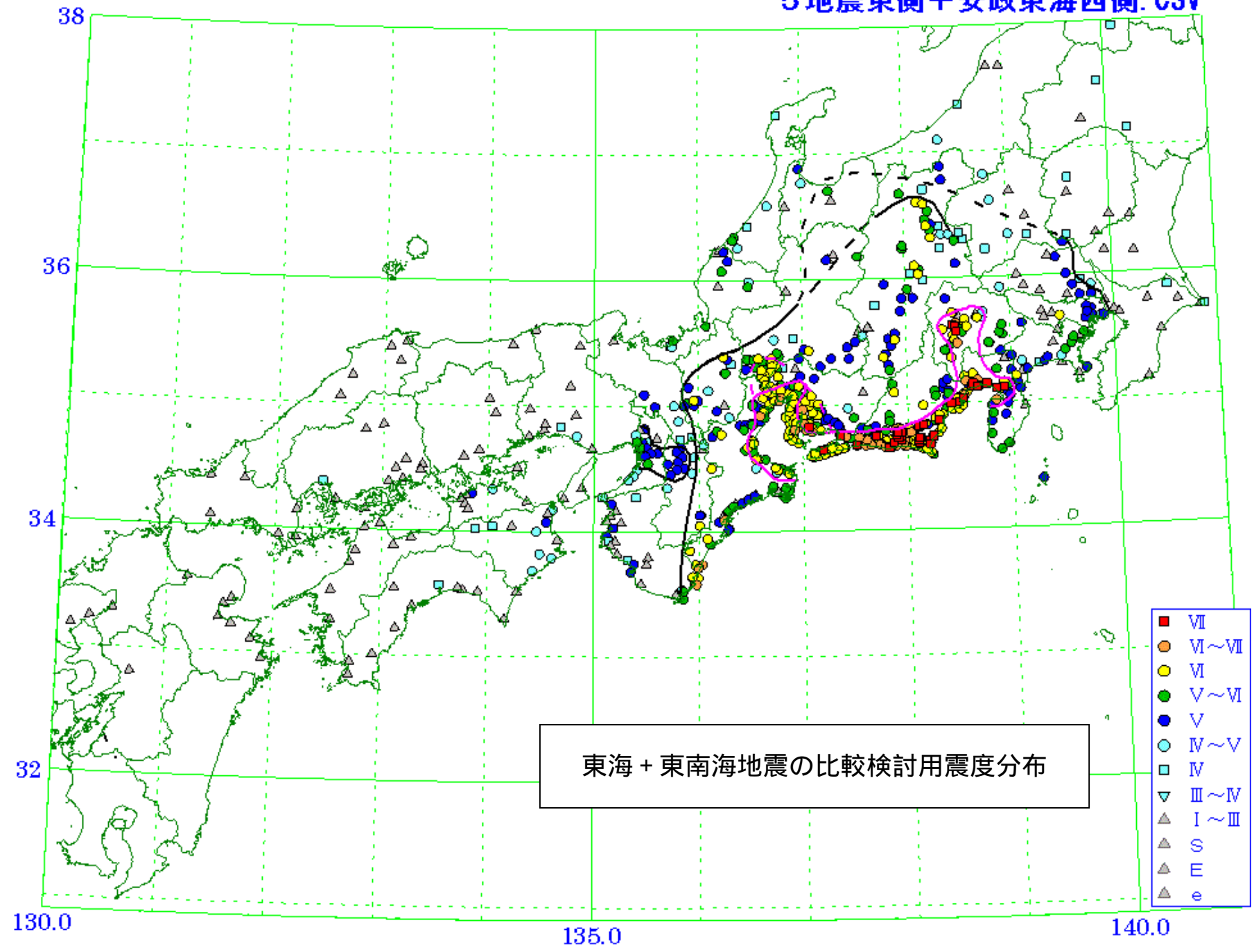
図 5地震の震度分布図

(宝永地震 + 安政東海地震 + 安政南海地震 + 昭和東南海地震 + 昭和南海地震)
 前掲の「3地震の震度分布図」に昭和東南海地震震度分布(宇佐美他、1986 による)の震度 以上の震度分布と、昭和南海地震震度分布(宇佐美、音松他 1985 による)の震度 以上の震度分布を重ねたもの





5地震東側+安政東海西側.CSV



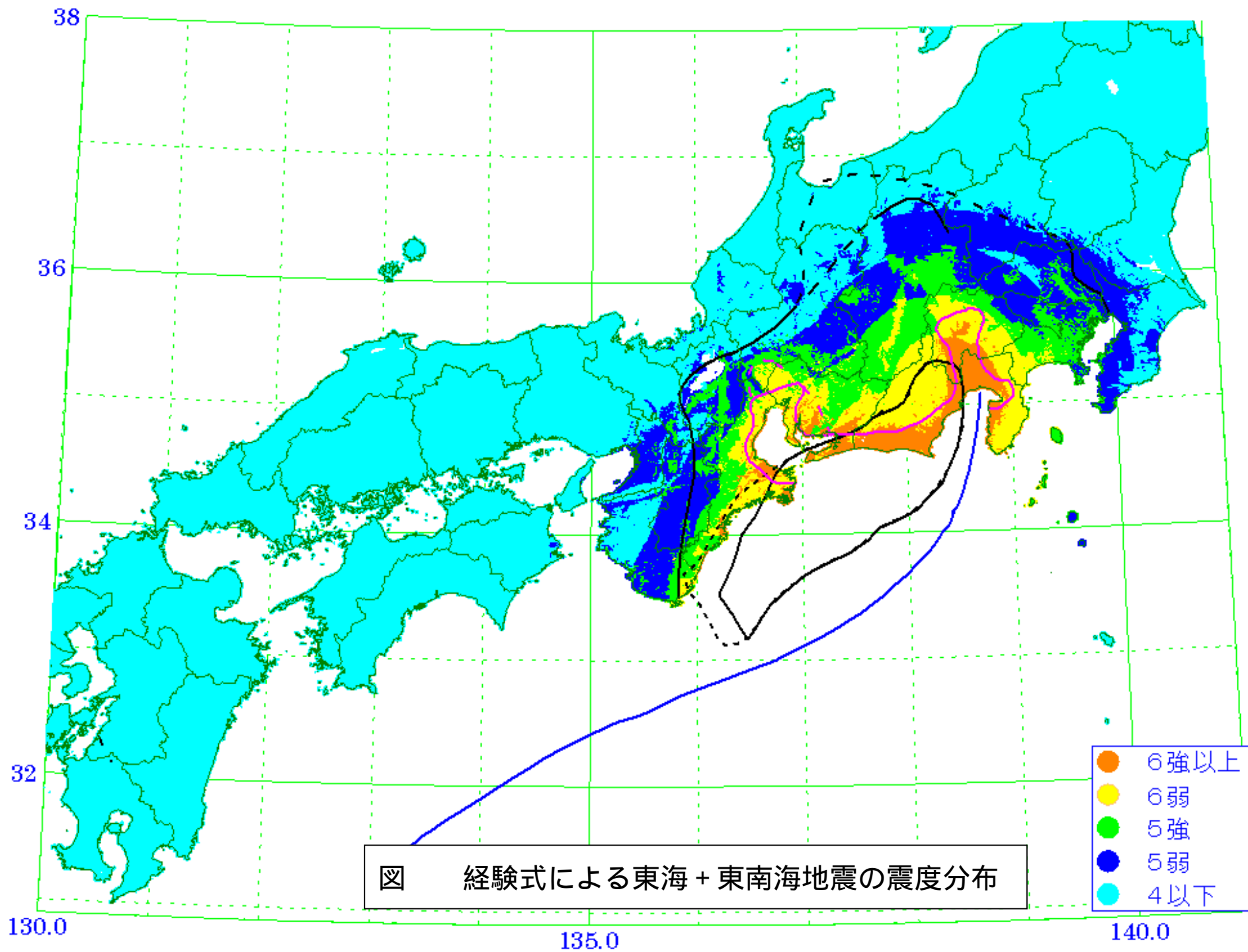
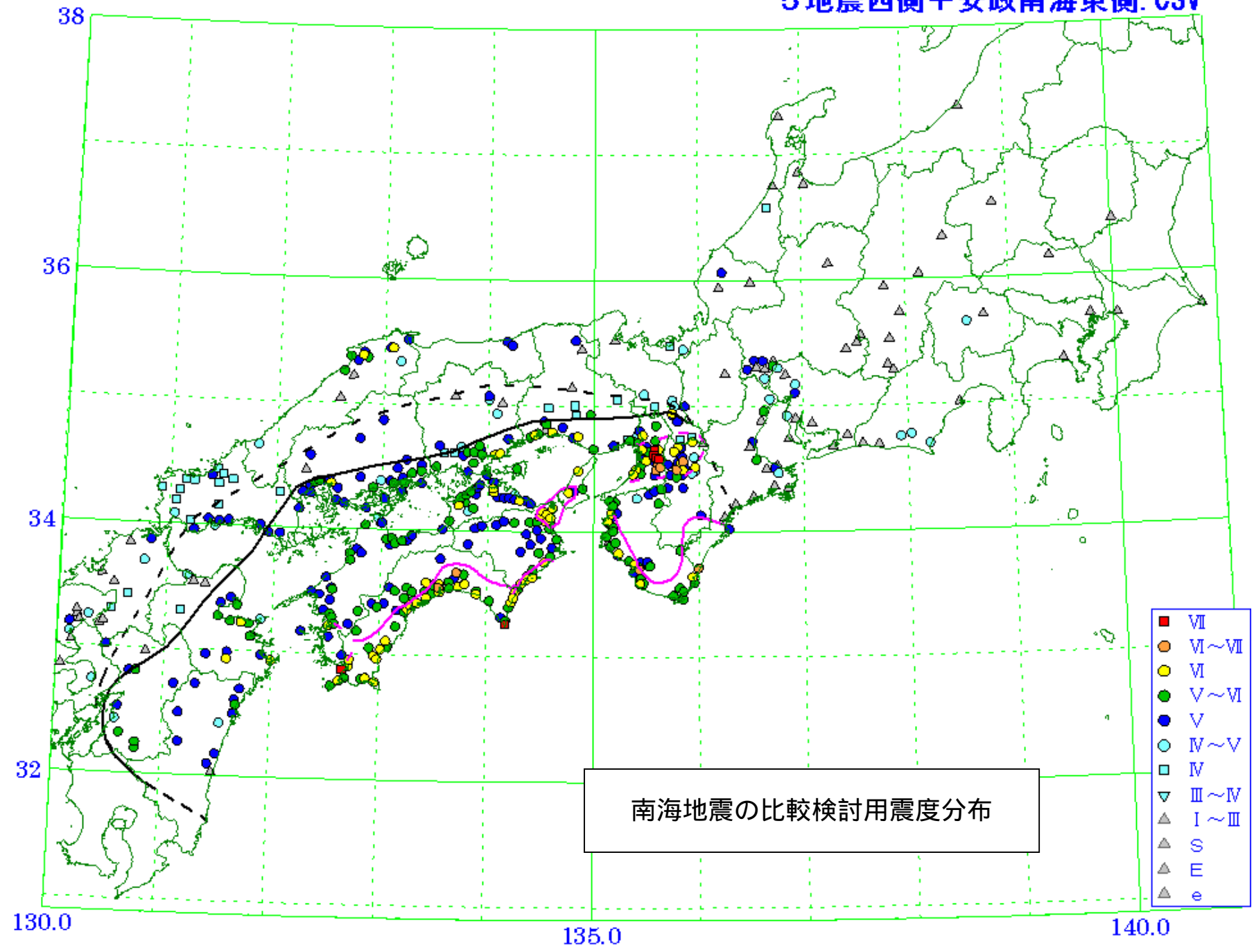
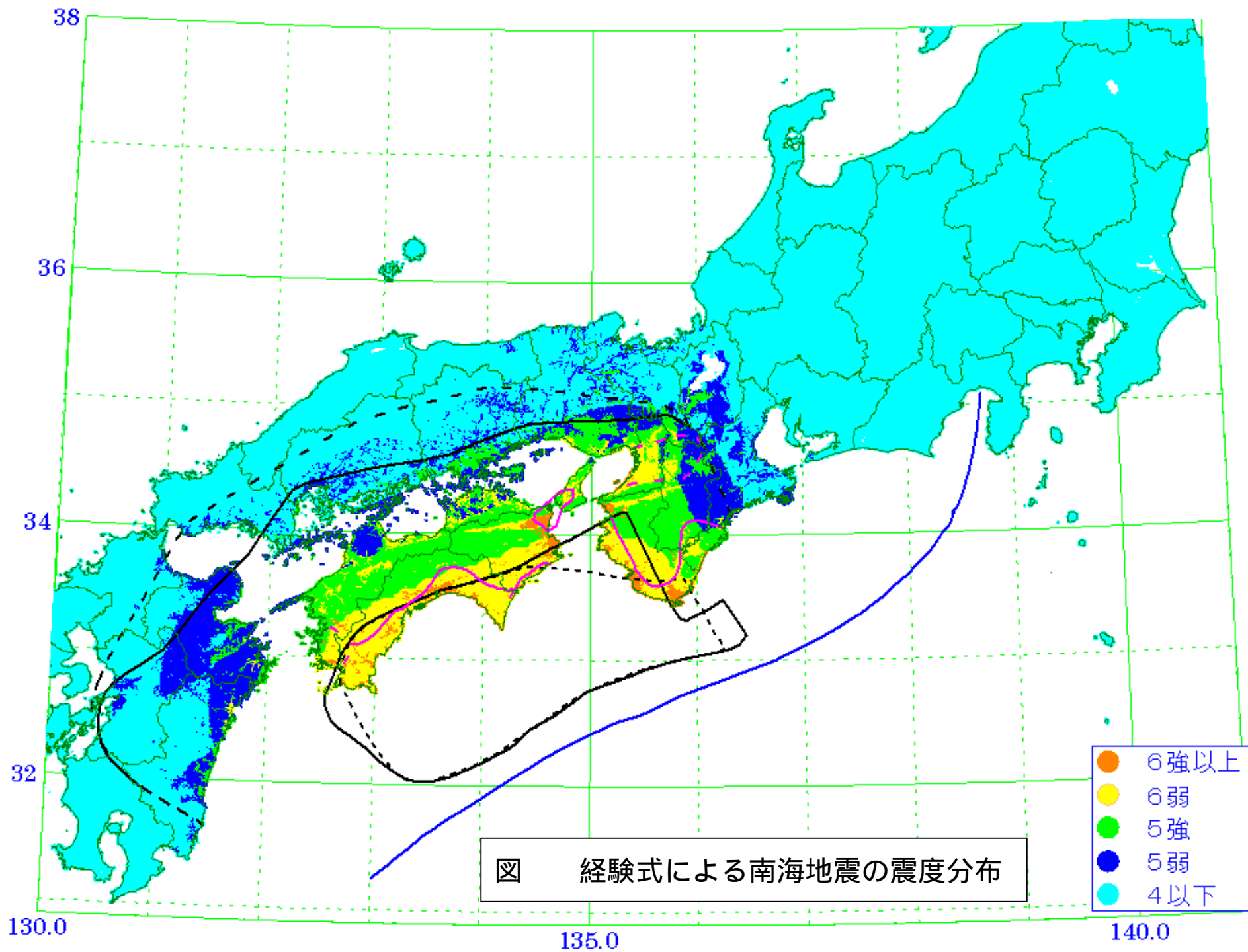
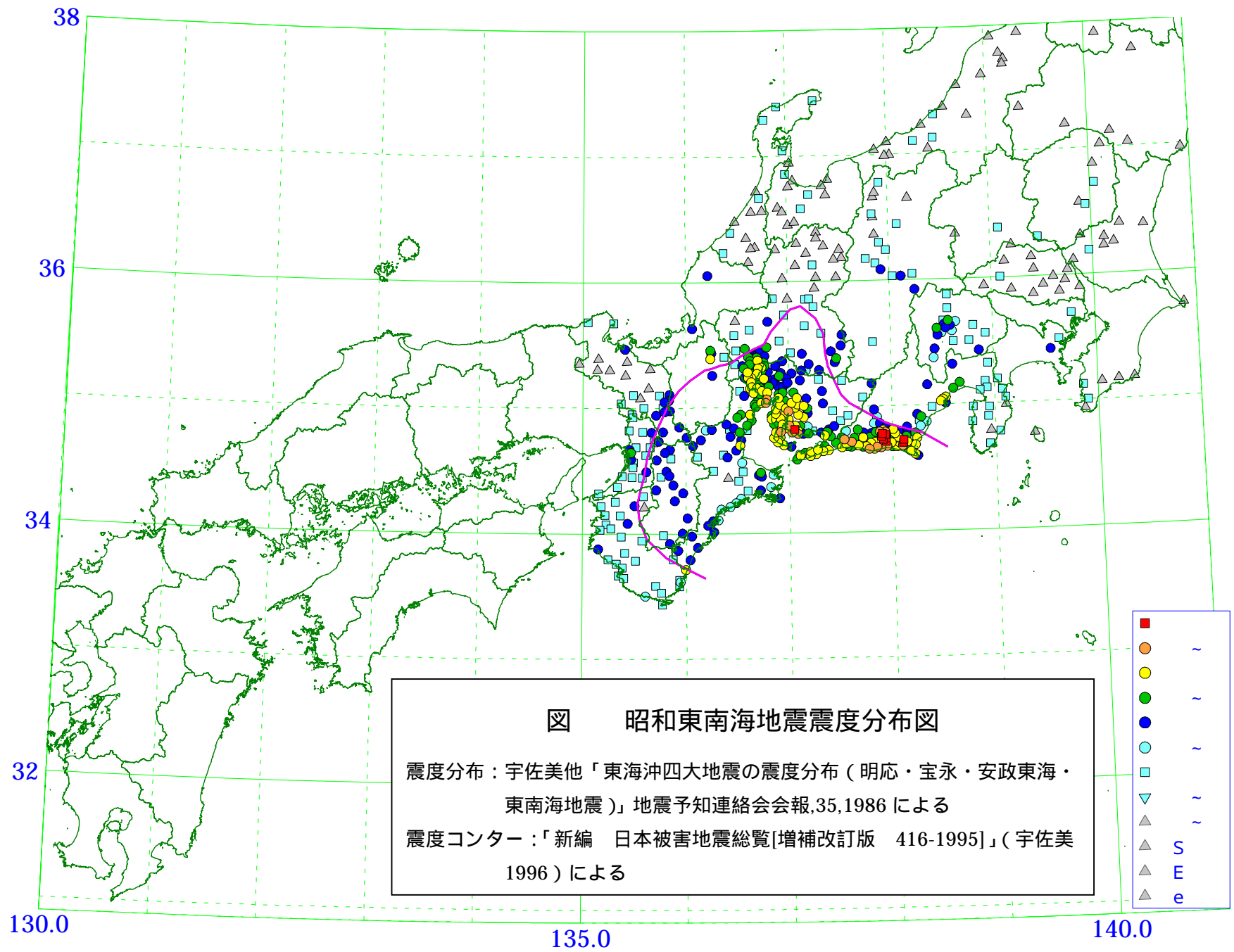


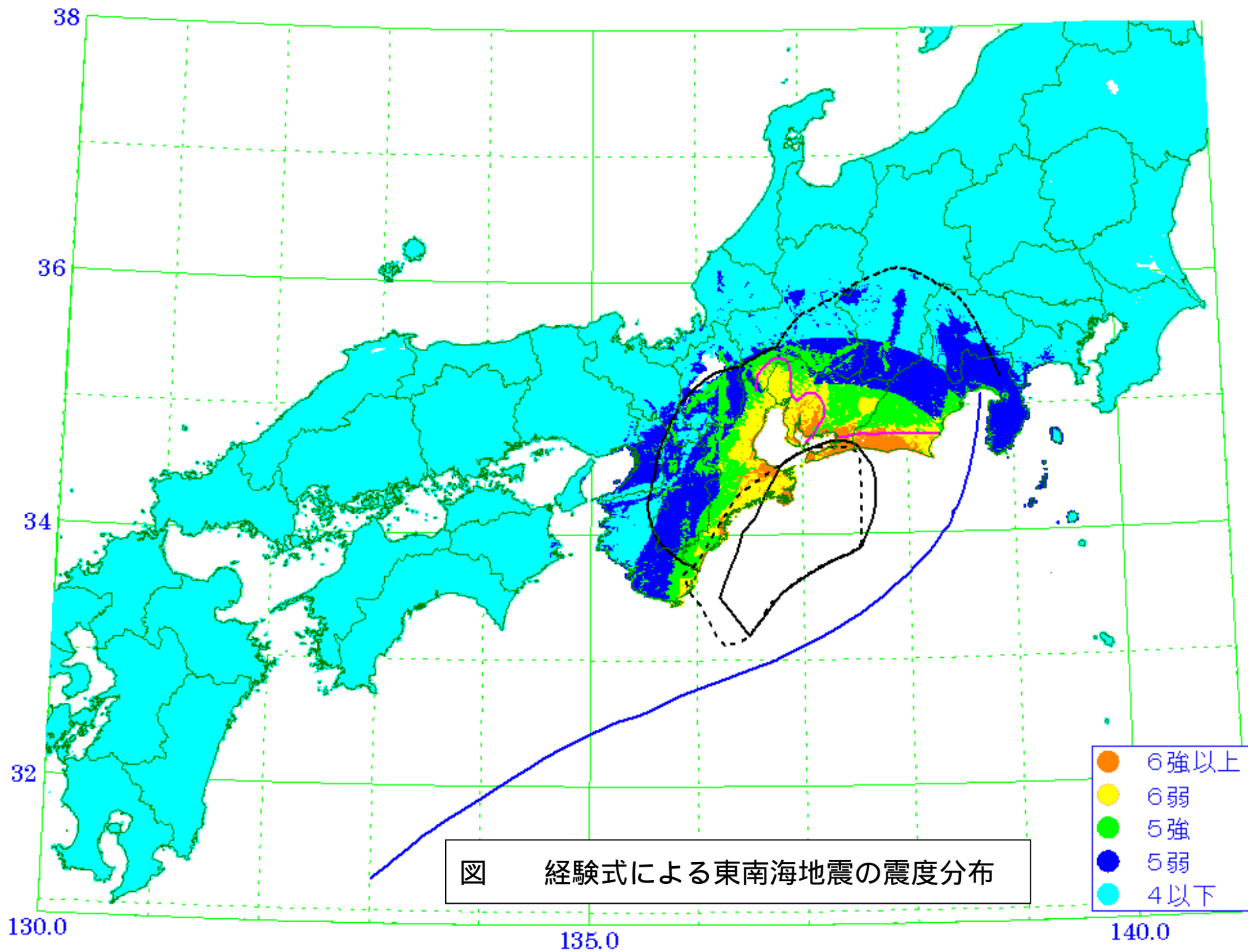
図 経験式による東海+東南海地震の震度分布

5地震西側+安政南海東側.CSV

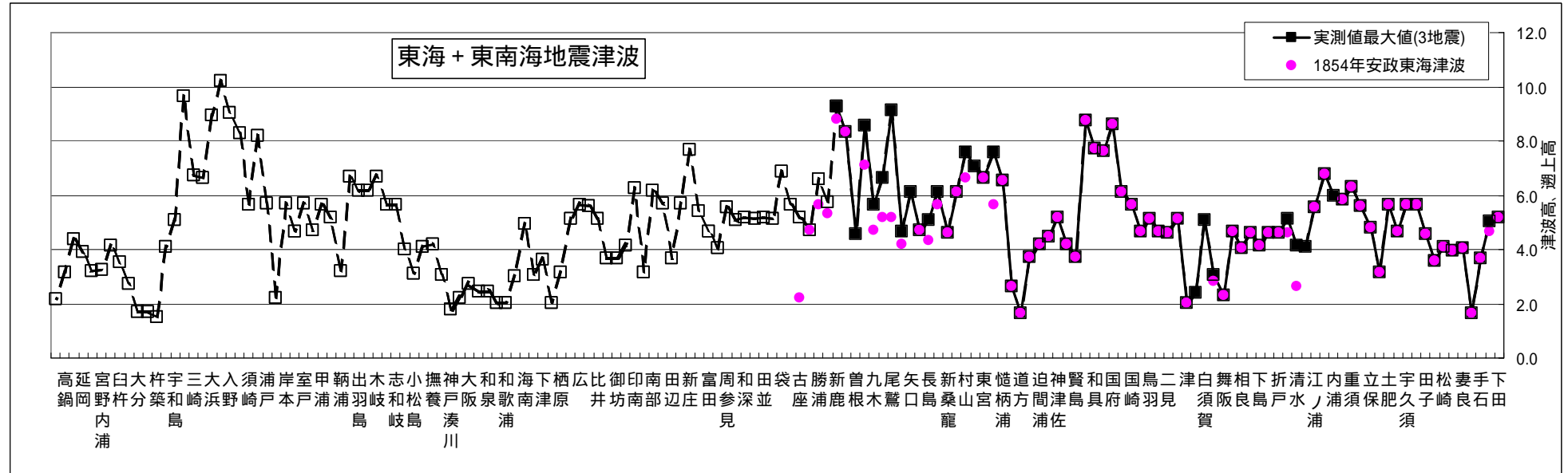




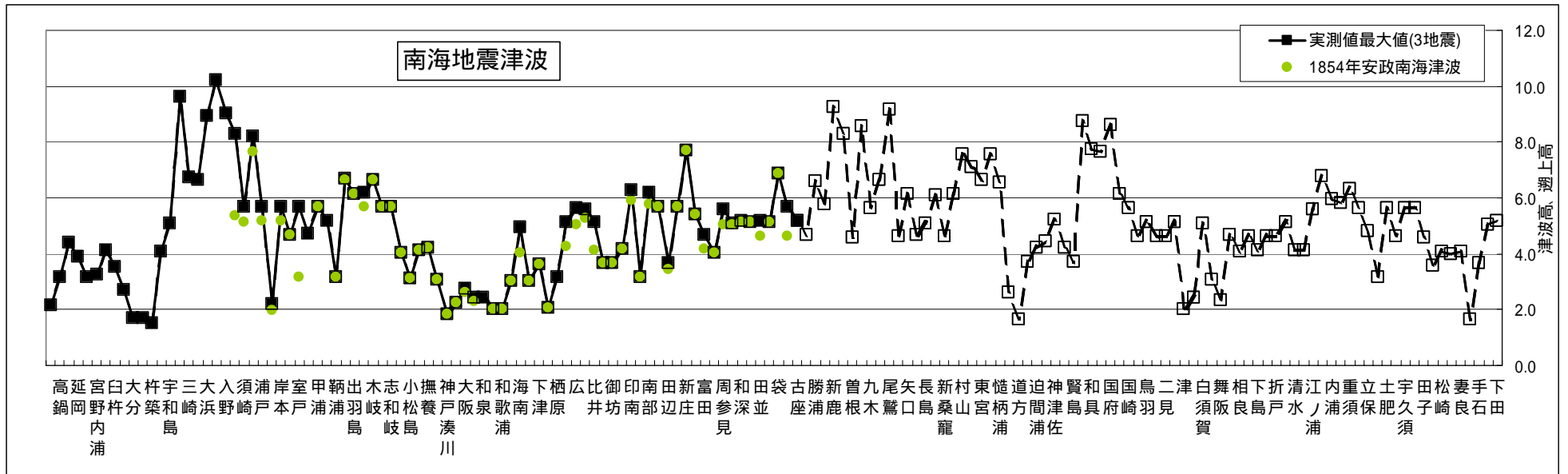




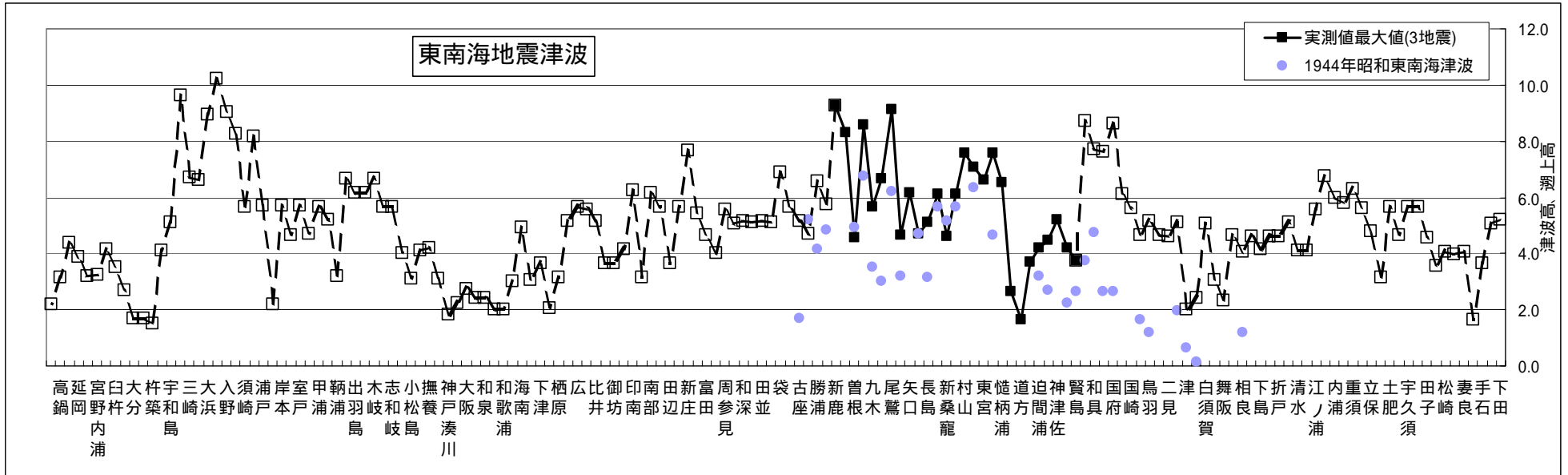
【比較検討のための東海 + 東南海地震津波の高さと 1854 年安政東海地震津波】



【比較検討のための南海地震津波の高さと1854年安政南海地震津波】



【比較検討のための東南海地震津波の高さと1944年昭和東南海地震津波】



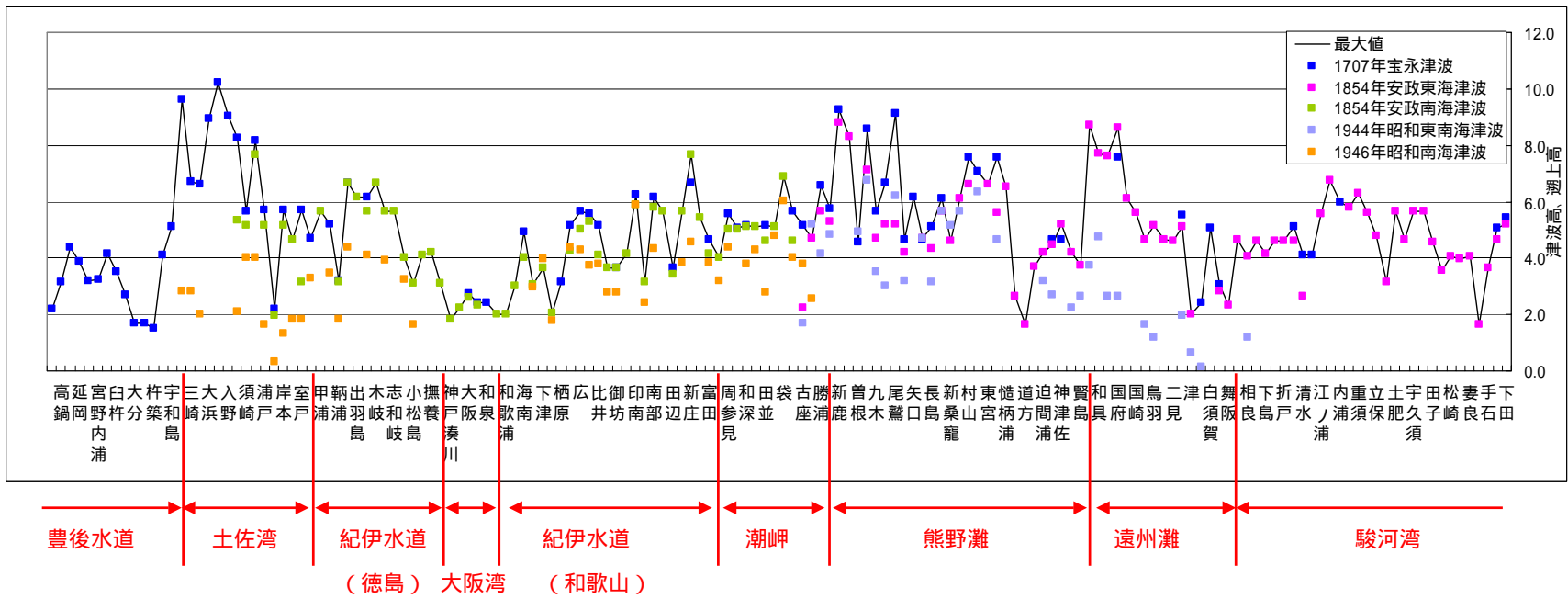


図 過去の津波の高さ
 (地震発生時潮位を差し引いた 1707 年宝永、1854 年安政東海および 1854 年安政南海の 3 地震の津波の最大値)